

# 地図を使ったフィールドワーク教育実践(3)

— 空想地図上の街・中村市を読む —

地理人 今和泉 隆行

法政大学キャリアデザイン学部 教授 梅崎 修

---

## 1. はじめに

本稿の目的は、大学における地図を使ったフィールドワーク実習方法を開発し、その実践を紹介・検討することである。2014、2015年度に行われた教育実践に関しては、既に今和泉・梅崎（2016、2017）で紹介したが、本稿は2016年度に行われた新しい試みの報告である。

地図を使ったフィールドワーク実習の目的やその特徴については今和泉・梅崎（2016、2017）でも記しているが、本稿から読み始める人も多いと思うので、繰り返しその目的を述べておきたい。以下では、主に今和泉・梅崎（2017）の第1節を引用している。

まず確認すべきは、フィールドワーク教育実践の目的は、地図の読み方を一つのノウハウとして教えることではないということである。本教育実践の目的は、地図を通して〈社会〉を考える方法を学ぶことである。

なお、フィールドワークに地図を使うこと自体は新しい試みではない。社会学や経営学などの社会科学分野、および民俗学や文化人類学などの人文科学分野において地域を対象としたフィールドワークを行う時に地図はよく使われる。特に地理学のフィールドワークでは、地図は必須の方法である。要するに、地図は、地形、生活、産業などの地域情報が表現されたものであり、その読解は地域を対象にしたフィールドワークにとって欠かすことができない道具かつ素材である。

ところが、フィールドワーク教育には、参与観察や現場密着の聞き取りが学

生たちの関心を集める傾向があり、地図による事前の調査が疎かになるという教育上の課題があった。つまり、あまり準備をせずに調査地域に入ってしまう、地域の全体像が掴めていないので、結局、地域を〈面〉としてではなく、〈点（取材先）〉として理解してしまうのである。特に大学外の短期滞在型の地域調査では、このような準備不足においてインタビュー調査が未消化になる危険性があった。結局、インターネットで取材先を探し、取材先で聞き取りを行っても、それは取材者である学生と取材先を点と点で繋げただけであろう。実際のインタビューを〈虫の目〉とするならば、地図の読解は〈鳥の目〉で地域を俯瞰することである。局所と全体の二つの目から地域を見る訓練がフィールドワーク教育には必要である。

加えて、フィールドワークにおいては、ただ正確に地図の情報を入手できるだけでなく、地図に描かれていない「社会」も地図の中から想像しながら読み解く必要がある。なお、大西・志村・田部・寺本（2005）は、大学生の地図好きと嫌いの発生要因を検討した上で、「生涯学習で地図や地図帳を活用するためのコンテンツはこれまであまり開発されておらず、このようなコンテンツの開発が今後、必要となるであろう」と記している。

社会認識における地図の意味を考察した松岡（2008、2016）は、地図と想像力を関連づけて「地理的想像力」の重要性を主張している。これらの研究は、若林幹夫（1995）『地図の想像力』が指摘した「地図は、個人が直接的に見晴らすことができない「社会」を全域的に可視化し、人々のあいだで伝達・共有される「社会的な」空間像」、そして厚東洋輔（1991）『社会認識と想像力』が指摘した「地図が社会認識の一つのモデル」という概念を引き継いで、「個人と社会を繋ぐメディア」としての地図に注目している。松岡（2008、2016）によれば、地図には、社会の要請に従って地図がつくられるという側面と地図が社会をつくるという側面があり、後者は社会学的な地図観である。そのうえで、個人・地図・社会の関係性を結び付ける能力概念として「地理的想像力」の重要であると指摘されている。グローバル化によって個人の取り巻く「社会」が大規模化・複雑化する中では、人々が「地理的想像力」を拡張し、「社会」を把握することが求められていること、更にはコミュニティ再生が課題となっている「地域社会」再発見するために地図が役立つことが指摘されている。

しかし一方で松岡（2008、2016）は、情報メディアやgoogleマップなどweb上の検索システムの発展によって地図に詳しさをリアルが求められるようになり、局所的なエリアの実用的な情報提供の追及が進められた結果、地理的想像力は縮小していることが危惧されている。すなわち、<いま・ここ>ばかりにフォーカスする断片的・自己中心的な地理認識とともに、想像力にもとづく面的な「社会」は不可視化されていく可能性がある。

以上のような地図をめぐる「地理的想像力」の現状認識を踏まえると、縮小していると思われる大学生たちの「地理的想像力」を再度拡張させながら、「社会」を面的に認識させる教育が求められていると言えよう。地図を読むとは、そこに描かれた人の営みや社会の仕組みを想像することであり、実際の訪問・聞き取りは、その想像された社会像を確認しつつ、時に違いを見つけ、再度、社会を想像しながら地図を読むという一連の相互的行為でなければならない。

2014、2015年に行われた地理ワークショップでは、地図という情報から様々な人々の生活や仕事（キャリア）を想像することで、「地理的想像力」の拡張を意図していた（今和泉・梅崎（2016、2017））。つづく2016年に行われた地理ワークショップにおいて学生たちは、今和泉が作成した空想地図（今和泉（2013））を素材に、そこに生きる人々を想像（空想）し、街の特性を把握して最後にまちづくりについて考えた。

「空想」という「遊び」の要素を取り入れたフィールドワーク実習は少ないと考えられる。実証研究の方法としてのフィールドワークに拘れば、「空想」に違和感を持つ人はいるかもしれない。空想の地図でフィールドワーク教育をするならば、実際の地図を使ってフィールドワーク教育をすればよいではないかという意見を持つ人もいるかもしれない。しかし、「地理的想像力」の育成のためには、限りなくリアリティを追求した空想地図が、参加者の想像力を刺激すると考えたい。言い換えれば、実際の地図は、その使用目的が明確であると考えてしまうがゆえに、その「実用性」に縛られて想像するという行為へと動機づけられないのである。

現実的に、地域フィールドワークの実習授業を行う大学は多いが、入学以前から地理的想像力が縮小しているために、その教育効果をあげられない授業も多いのではないかと。この空想地図ワークショップの試行は、地域フィールド

ワーク教育の授業改善に取り組む人たちにとって意義があると言えよう。

## 2. 空想地図とは何か

### (1) 「空想地図」誕生の経緯

今回のフィールドワーク教育のプログラムでは、筆者の一人である今和泉が制作した「空想地図」を使用した。これは実在しない都市の詳細な地図である。空想地図についての詳細は今和泉（2013）『みんなの空想地図』（白水社）にまとめてあるが、ここでは空想地図ができた経緯やその特徴を説明する。



図1 空想地図「中村市」の一部

実在しない土地の空想地図は、今和泉が7、8歳から趣味で描き始めたもので、現在も制作・更新中の代表作は「中村市（なごむるし）」の空想地図である。中村市は、日本と酷似した国の首都圏郊外にある大都市で、郊外ベッドタウンでありながら県庁所在地でもあり、日本ではさいたま市や千葉市に近いと

言えよう。

この地図は空想ではあるが、現実離れた理想の都市を描くのではなく、現代の日本社会で起こりそうなことを多分に盛り込んで、現実的な都市の姿を描いている。空想地図に描かれた都市は、これとって大きな問題はないが、これから人口減少を迎え、製造業は伸び悩み、再開発の計画はあるものの実際には進まない…等の課題もある。すなわち、日本における現実の都市を想定している。

7～8歳の頃、今和泉が空想地図を描き始めたきっかけは、幼少期に地図やバスの路線図をよく見ていたことや、家族全員で新しい土地に引越し、地元の地図を見ながら「新たな日常」を開拓してきたことも大きく影響している。本人は無意識に描き始めているので、きっかけは大人になってから類推する限りだが、馴染みの深い表現手法である地図を使って日々を過ごす社会の様子を描きたい…なんなら、行ったことのない都市に引越し、「新たな日常」を身につける感覚で、未知の都市をゼロから描くことに楽しみを覚えたのである。

実際に、行ったことのない場所の地図を見て、その後実際にその場所に行ってみるという行為は、もちろん親に連れられてだが、探索の楽しみの一つだった。実際の地図で未知の場所を探すことも、空想地図で未知の日常を描くことも、等しく「未知の日常を想像し、開拓する」ための入り口として地図が機能していたと言える。いまでも行ったことのない場所に観光で行く場合は、地図を見て、行きたい場所を見つけていた。今和泉にとっての地図は、観光ガイドやクチコミサイトのような、目的地をみつけるためのツールでもあった。

多くの人にとって、実際の地図は目的地までの最短経路を探すための道具にすぎない。地図から未知の日常を想像しながら行きたい目的地を探すものとは考えていない。今和泉にとっての空想地図は、未知の場所を想像、未知の日常を想像する楽しみを味わう個人的趣味であったが、空想地図が人々の公開されることで見る人に地図を見ながら「未知の日常」を思い浮かべてもらう素材になった。

## (2) 想像を生み出す細部のリアリティ

個人的な空想地図が、多くの他者にみられる機会が増えた結果、読者たちの

想像力を刺激するために、地図以外の日常の断片があればよいと考えるようになった。そこで今和泉は、空想し易いように日常の断片情報をいくつか制作した。空想地図は日常を俯瞰した全体像で、それぞれの断片は個々の場所にズームアップした後に見えてくる細部であると位置づけた。都市のマクロとミクロと往復し反芻することで、空想都市のリアリティを形作ろうとしたのである。以下ではその細部の事例を紹介したい。

図2に示したのは中心市街地である平川のタウンガイド、図3に示したのは市街地（出ノ町）のグルメガイドである。むろんすべて今和泉が作成した架空の場所を紹介しているのだが、この情報があることによって、この空想都市の住民がどのような生活を送っているのかを想像することが可能になる。例えば、この公園で誰が遊び、このレストランで誰がどのように食事をしているのかを想像できる。

図4は、バスの路線図である。路線図があることで、通勤経路や休日の過ごし方などを想像することができる。また図5は、中村市で展開されている企業・店舗のロゴの一覧である。各企業や各店舗は、実際に如何にもありそうな企業や店舗に近づけてあるので、産業立地や商業立地を踏まえつつ、企業や人々のビジネス活動を想像することができる。さらに図6は、中村市内の賃貸物件の間取り図である。物件情報は、ここに住む人の生活を想像させる情報であるし、これを見た人達に賃貸市場の動向を想像させることができる。



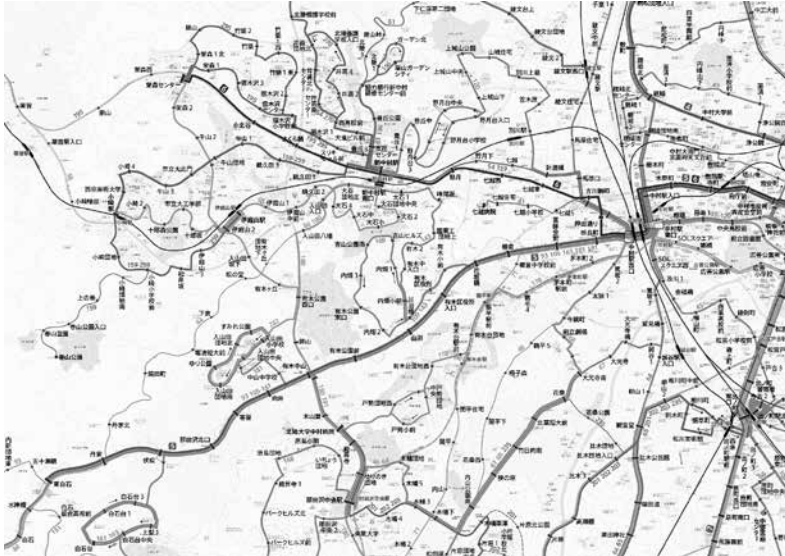


図4 中村市内を走るバス路線図



図5 中村市で展開されている企業・店舗のロゴ



## 賃貸マンション

《名称》メゾン・キュリー香山荘

所在地/中村市北区綾文 5-22-5  
 構造規模/RC造地上4階建て  
 契約期間/2年間  
 更新料/新賃料の1ヶ月分  
 敷金/1ヶ月 礼金/なし  
 駐車場/月額20,000円

1994年築

201号室  
※他にも空室あり

南水線「綾文 駅」 徒歩 10分  
 西急線「綾文町 駅」 徒歩 7分



賃料	<b>53,000 円</b>
	※管理費 2,000 円

エアコン付  
バス・トイレ別  
ガスキッチン  
全空角部屋

南向きバルコニー  
日当たり良好!

京南府(9)-第54146号

-豊かなシティライフの創造-

株式会社 EXPERT HOME

エクスパート・ホーム

(荒瀬店)  
中村市北区荒瀬東1-23-10 KF-Fワレビル1F

TEL:132-890-8098 FAX:132-890-9115

図6 中村市内の賃貸物件の間取り図

以上要するに、こうした空想都市の細部ができあがってくることによって、都市の細部を想像できるようになってきた。空想地図や空想都市の細部イメージ制作は、もともと作者である今和泉の自己満足にすぎなかったのであるが、2013年の出版、2015年から数回行っている一般展示を通して、人々がどのように空想地図を見るのか、空想地図が人々の何を刺激するのかについて関心を持つに至った。

今和泉はこれまで数回展示を行っているが、空想地図を長時間眺めている人々を何回か見た。もともと地図が好きな人が、空想地図を眺めて興味を持つことは理解できるが、「地図には興味がない」、「むしろ苦手である」という人々が空想地図に興味を持ったのは意外であった。実際の地図と空想地図の差異は、地図に描かれている舞台が実在するかしないかにすぎないという意見もあるが、それ以上の差異があると考えられる。地図の違いを以下のように定義できるであろう。

- ・実際の地図…その土地に住む人、よく知る人がおり、基本的に他人のフィールドである。情報は検索すれば出て来る。そこに見る人の想像の余地はない。
- ・空想地図…その土地に住む人、よく知る人はおらず、誰のフィールドでもない。情報は検索しても出て来ることはなく、見る人の想像で入ることしかできない。

ここで、あえて空想地図だからこそ、地図の「目的地までの最短経路を探すための道具」以外の見方に出会うことができたと考えることができる。つまり、目的地（目的）の設定できない、実用性のないものを目の前に、見る人は少々の混乱するとともに、目的がないからこそ想像力を働かせることができたのである。空想地図は、日常の記憶の断片と想像力を働かせるのであれば、都市を面的に把握する力を養う効果があると仮定し、今回、この空想地図を使ったワークショップ実施に至った。

### 3. 空想地図を使ったワークショップ

今回は空想地図の模様から、その土地の雰囲気、風景、歴史を想像するフィールドワーク教育プログラムとした。誰も土地勘がなく、実際に訪問することができない空想の都市にアプローチするには、日常の記憶の断片と想像力を働かせるしかない。2016年度の3年生の研究テーマが団地、2年生のテーマが商店街とショッピングモールだったため、団地や商店街に寄せて、ワークショップを設計した。加えて、地図だけ目の前にあっても全体像はつかみにくいため、大判の地図（11×13kmの範囲）とは別に、この地図に描かれた地域の特徴概況地図（図7）、家賃相場地図（図8）、交通網（鉄道路線図）（図9）等の資料も提示した。先ほど説明した細部情報と同じく、読み手の日常経験と想像力を刺激する素材である。



図7 中村市内の特徴概況地図



図8 中村市内の駅別家賃相場地図

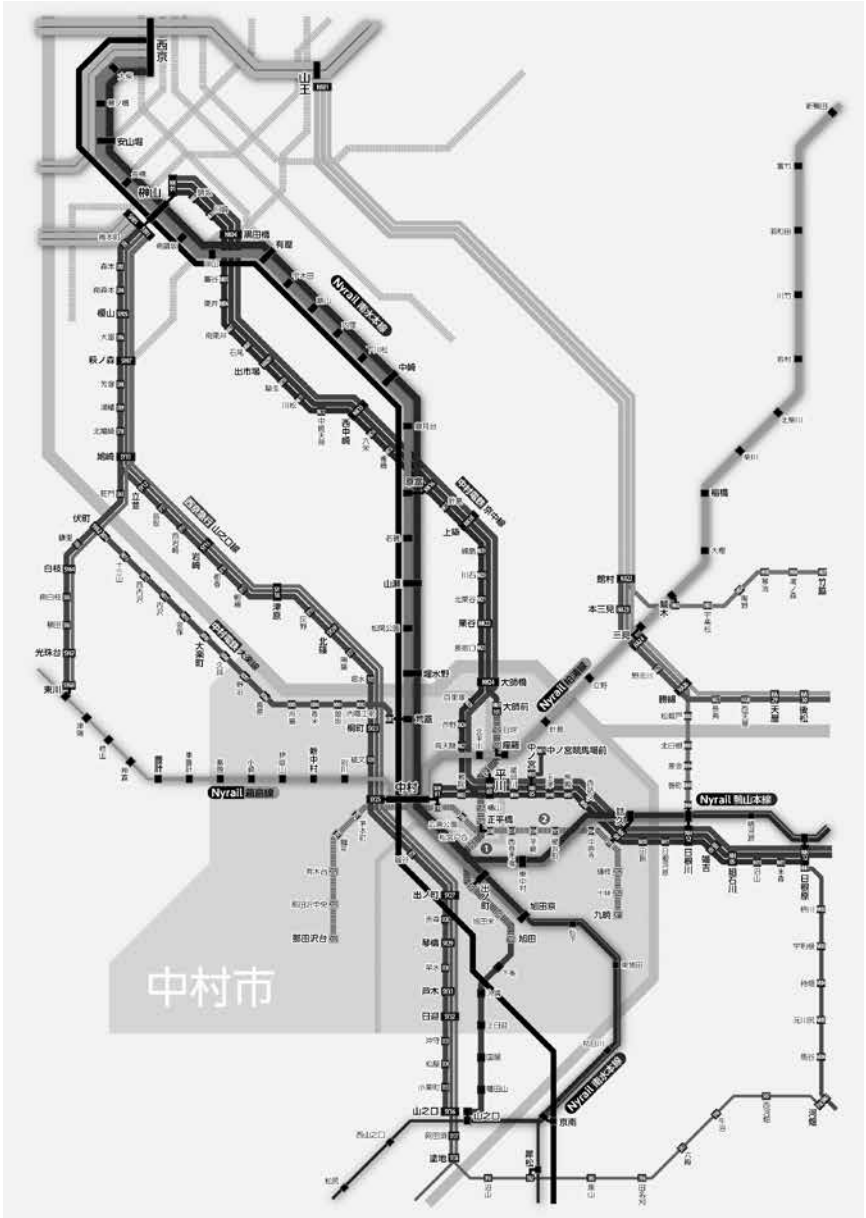


図9 中村市内の鉄道網を記した路線図

続いて、具体的なワークショップの進め方について説明しよう。ワークショップは、1グループ4人前後×6グループに分けて、Work 1～Work 3の3部構成で実施した(図10)。それぞれのワークの進め方を説明し、その後、参加者の反応を考察しよう。



図10 話し合いの風景

<Work 1>：グループごとに異なる年齢、職業の人物を割り振って、それぞれの人が住むのに適切な街を検討してもらう。6人の人物は、19歳女性(市内の大学に通う大学生)、24歳男性(西京に通う独身サラリーマン)、27歳女性(西京に通うサラリーウーマン)、31歳男性(転職活動中)、39歳女性(フリーランス)、61歳男性(市内で年金生活)の6人である。各人の属性、仕事内容、収入、家族構成を踏まえて、それらの生活圏や勤め先を想像しなければ、適切な街を見付けることは難しいと言えよう。

この<Work 1>では、まず、地図から学生たちが、どの程度個々の街の特質を把握できているかを確認し、アドバイスをした。地図を見ながらの話し合いを聞くと、参加学生の多くは、道や施設の密集具合から、その場所の人口密度を比較的容易に読み取ることができていた。しかし、道路形状や集合住宅団地の形状や立地から、そこが新しい土地か古い土地かについて読み取れる人はほとんどいなかった。今回のワークショップは、ほとんどの人が空想地図を初見だった上に、地図を深く読む眼が求められたため、ワーク自体は難解だったのかもしれない。

街の特性に関しては、グループワークをこなす中で少しずつ掴んで行ったと言えよう。「どんなお店があるか、賃貸の値段は、若者が多いか老人が多いか、通勤時間は」と問いかけることで、参加学生たちに彼らの現実の日常経験を思い出させるように促した。先述した細部の情報も適宜提示した。

ところで、〈Work 1〉の作業は、街を選ぶという、一見すると簡単な選択である。しかし、その選択が空想地図の中で説得力を持つためにはいくつも選択肢を同時に考える必要がある。要するに、単純に住むという行為だけでなく、食事、余暇の過ごし方も含めてライフキャリアの細部を想像しなければならない。むろん、家族構成を踏まえて世帯所得（及び出費）も考えねばならない。さらに、どこの職場でどのような仕事をして賃金はどの程度か、どこから通勤するかというビジネスキャリアの細部を想像することも必要になる。

このようなワークの選択とライフの選択は、そのほとんどが同時決定である。低い賃金では住めない住居もある。また、同じ世帯所得でも家賃と間取りを考えれば、独身男性で住める街と子供が二人・一人稼ぎ専業主婦世帯で住める住居は異なる。さらに、また、短い通勤時間でなければ勤めにくい企業もあるかもしれない。このような制約された複合的な選択は、現実の社会人であれば、実際の生活で行っていることであるが、学生にとっては縁遠い選択と言えよう。参加学生たちは、空想地図上に住む場所を選ぶ過程で、このようなキャリアの選択が多くの同時決定によって成り立つという事実に直面し、深く考えるようになった。

続けて、〈Work 1〉で中村市に慣れてきた後、〈Work 2〉、さらに〈Work 3〉を行った。〈Work 2〉では、徐々に把握できて来た街の特性を他の街と比較することでより明確に把握することを目的としている。

〈Work 2〉：それぞれのグループに異なる場所について、市内の類似する場所との差異と、現実の地域で近いところを挙げる。6箇所は、谷芝ニュータウン（1970年代に中心駅から離れた場所に開発された集合住宅メインの大規模団地）、荒蓋駅近くの商店街（古くから中小工場が多く、人口密度も高い地域の中心市街地）、入山田団地（1970年代に丘陵を開発して造成した小規模な集合住宅団地）、出ノ町駅周辺の商店街（市内第3の市街地で拠点性もあるが、

住宅地として人口も多く、小規模な個人店が密集する商店街)、河合町団地(市街地至近の古くからの集合住宅団地)、橘山～正平橋間の商店街(市の中心地の古くからの商店街で、一時期より賑わいは衰えたが、リノベーションが盛んな地域)である。

<Work 3>:最後に、<Work 2>で選んだ団地or商店街について、「他の街より良いポイント、その街が抱える問題・課題、それらを解決する方法」を検討する。

<Work 2>は、半径1キロの徒歩の生活圏ではなく、より広域の視点から生活圏、さらに地域ビジネスの構造を読み解く教育実践になった。<Work 3>は、ゼミ活動に沿った形で行った。3年生は団地調査を終了しているので、団地の状況を理解して上で話し合いを行えているが、2年生は商店街の文献を読み始めたばかりなので、自分の意見を持つのが難しいようだった。

ところで、今回のグループワークを振り返ると、参加学生たちにとって<Work 2>と<Work 3>は難易度が高かったのかもしれない。「地図を読み取る力をもとに、他の地域や実際の地域と比較し、課題と対策を考える」のではなく、基礎力としての「地図を読み取る力」を育むワークを繰り返したうえで、今回の後事のワークに挑戦した方が地域の問題・課題とその解決策に対する議論が深まったと考えられる。次回以降の課題は、参加者の日常の記憶や想像力が及ぶ範囲を事前に把握し、それに適した難易度のワークを設定することである。

#### 4. キャリアデザイン学のまちづくり研究に向けて

今回のワークショップでは、今和泉が作成した空想地図を「想像力」の基盤として、キャリアと街を考えた。参加学生たちは、はじめに空想地図を見た時点で驚きの声を挙げ、ワークを行いつつ、徐々にその世界に引き込まれていった。空想であるがリアリティがあるという不思議な空間であるから、地図の持つ実用性を離れて、自由な空想ができるようになったと言える。加えて、今和泉作成の街の細部の情報がその想像力をさらに刺激したと考えられる。



多様な属性の人々の「住む場所」を選ぶという行為は、ワークとライフに関する様々な選択肢を矛盾がないように組み合わせなければならない。賃金、通勤時間、家賃、生活圏、家族構成が相互に影響し合うということを理解すれば、「住む場所」を選ぶという行為は、人々のキャリアを具体的に想像することでもあった。

このような個人のキャリアと場所との関係を踏まえた上で、街の特性を把握し、なおかつ個人のキャリア選択だけでは解決できない社会問題を如何に解決すべきかを話し合った。たとえば、共働き世帯が子供を保育園に預ける場合、通勤圏と家賃を同時に考える。その上で地域に保育園が少ないという問題を想像していくのである。

地域研究・まちづくり研究は、様々な学問分野で研究テーマとなっているが、今回のフィールドワーク教育実践は、キャリアデザイン学の視点から街を考える試みになっていると言えよう。ここでの経験を活かして、学生たちは、フィールドワーク調査研究に取り組んでいった。

### [参考文献]

- 今和泉隆行 (2013) 『みんなの空想地図』 白水社
- ・梅崎修 (2016) 「地図を使ったフィールドワーク教育実践 (1) - 想像地図散歩ワークショップ」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』 第13号pp.143-156
- ・梅崎修 (2017) 「地図を使ったフィールドワーク教育実践 (2) - 空想地図づくりのワークショップ」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』 第14号pp.201-226
- 大西宏治・志村喬・田部俊充・寺本潔 (2005) 「大学生の地図意識に見る地図好きと地図嫌いの発生要因」『地図』 43 (Supplement) , pp.52-53.
- 松岡慧祐 (2008) 「個人と社会をつなぐ地図：現代社会における地理的理想力の可能性」『フォーラム現代社会学』 第7号 pp.100-113
- (2016) 『グーグルマップの社会学 ググられる地図の正体』 光文社新書
- 若林幹夫 (1995) 『地図の想像力』 河出文庫
- 厚東洋輔 (1991) 『社会認識と想像力』 ハーベスト社

**ABSTRACT****Report of Fieldwork Education Using  
Maps (3)  
– An Imaginary Map Workshop**

Takayuki IMAIZUMI  
Osamu UMEZAKI

---

This paper introduces our third workshop on fieldwork using maps and conducts discussions regarding this in the university after first workshop introduced by Imaizumi & Umezaki(2016,2017). In fact, using maps for fieldwork is not a new attempt. However, some problems exist in using maps that students have not sufficiently investigated as they are only interested in participant observation and interview methods. Briefly, students would go into the field without much preparation, making it difficult for them to understand the essence of fieldwork. Therefore, we designed the workshop for building a strong “geographical imagination” and examined its effect.